革命通信

第5号　領価80銭　3月1日発行

一、始まりつつある革命的情勢に、武装して闘う非合法党建設で応えよ！

一、2・10H丁闘争に勝利す！

一、三里塚・岩山大鉄塔を死守せよ！―2・22三等報告

一、武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党の創建と我々の綱領―戦術―組織――山県直

派遣赤軍同盟書記局　革命者同盟

責任編集兼発行人　マルクス・レーニン主義クラブ

始まりつつある革命的情勢に、武装して、闘う非合法党建設でこたえよ

(1) もっとも激烈な階級闘争、革命戦争と、革命と反革命の一時代が始まっている

我々は、こうした天下大動乱の時代を喜んで迎える。なぜなら、社会主義革命の勝利＝プロレタリア階級独裁の樹立は、共産主義革命の完全な勝利は、革命的情勢なしに存在しないからである。

ベトナム・インドシナの民族民主革命戦争の勝利は、米帝の反革命世界体制を解体的危機に陥れた。50年代から70年代初頭まで闘い続け、遂に、米帝を打ち破ったベトナム・インドシナ人民は、全世界のプロレタリア・勤労大衆の偉大なお手本である。もっとも激烈な階級闘争、革命戦争、革命と反革命の一時代は、ベトナム・インドシナ人民が切り拓いたのだ。中国、ベトナム、朝鮮民主主義人民共和国は、社会主義建設を推進する一方、同時に、革命の根拠地として民族解放闘争を強力に支援している。民族解放斗争は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの第三世界に拡大し、帝国主義と封建的地主階級買弁ブルジョア階級との闘いを強化している。南朝鮮・パレスチナ・アンゴラ・南欧は、革命の大前線である。米帝は軍事的敗北と政治的威信の低下に歯止めをかけ、反革命的世界体制を必死に再編、維持、強化せんとしている。ソ社帝は、米帝にとってかわり、新たな反革命世界体制を組織せんとしている。ソ社帝は全軍事力の約3分の2を欧州に配置しており、いつ、電撃的に侵攻するかもしれない。米ソ2大帝国主義の争奪戦＝覇権争いは、欧州を中心に全世界に拡大している。ソ社帝が優性で米帝が劣性である。ソ社帝は第三世界のプロレタリア階級農民の「革命根拠地＝ソ連」という幻想を利用しながら進出し、援助とか支持などという名目のもとで、合弁事業を組織し、高額の利潤をうるとともに、資源をもかすめとっている。更に、軍事基地を強制的に提供させている。

（革命的）

一方、恐慌と民族民主革命に直面し、米ソ2大帝国主義の主戦場になっていることで、プロレタリア階級独裁の樹立にむけた革命的情勢が端初的に始まっている。日本を含む南朝鮮の民族民主革命に直面し、恐慌の中で、プロレタリア階級独裁の樹立にむけた革命的情勢が端初的に始まっている。総じて、社会主義国を根拠地とする第三世界の民族解放闘争が拡大し、西欧・日本に於いてプロレタリア階級独裁樹立のための革命的情勢が端初的に始まり、米ソ2大帝国主義の第三次大戦の危険が増大しているのである。

(2) 革命的情勢が端初的に始まっている

かって、レーニンは『第2インターナショナルの崩壊』の中で、革命的情勢の「三つの主要な徴候」として、次の如き内容をのべていた。「(1)支配階級にとっては、いままでどおりの形で、その支配を維持することが不可能なこと、「上層」のあれこれの危機、支配階級の政策の危機が割れ目をつくりだし、そこから、被抑圧階級の不満と激昂がやぶれ出ること。革命が到来するには、通常、「下層」がこれまでどおりの生活することを「のぞまない」だけではたりない。さらに「上層」がこれまでどおり生活してゆくことが「できない」ことが必要である。(2)被抑圧階級の欠乏と困窮が普通以上に激化すること、(3)右の諸原因によって、大衆の活動性がいちじるしくたかまること」

今日の日本の情勢は、レーニンが明らかにした革命的情勢の「三つの主要徴候」が端初的にあらわれ、始まっているといえる。日帝は㋑朝鮮侵略・反革命を強化し、戦争を準備するために㋺プロレタリア階級を主体にした階級闘争の発展に対し㋩迫まりくるプロレタリア階級独裁の樹立＝社会主義革命に対し、天皇制を政治の前面に登場させ、これと軍隊・警官・官僚を結合し、ブルジョア民主主義的統治形態から天皇制ファシズム的統治形態への転換を推進している。日米安保体制下での日帝支配＝ブルジョア階級独裁を延命させんとしている。日帝は、統治形態の反動的転換を目指し、治安体制の強化、行政執行権力の肥大化、議会の空洞化、民間反革命・右翼の育成、刑法「改悪」攻撃、小選挙区制の実施を急ピッチで具体化している。こうした実体形成を背景に差別主義、排外主義、権威主義イデオロギーが強化されている。松生丸事件を利用した朝鮮民主主義人民共和国批難のキャンペーン、在日朝鮮人の民族的民主的権利を奪う入管法「改悪」攻撃、国土館生征を中心にした在日朝鮮人高校生へのテロ、朝鮮総連の非合法化策動は、排外主義のあらわれであり、一昨年10月31日の狭山「差別判決」は差別主義の強化以外なにものでもないし、昨年の天皇訪米、そして、今年の4月頃に予定されている天皇訪沖こそ、権威主義のあらわれである。日帝は、こうした下に、プロレタリア・勤労大衆を統合せんとしている一方、と同時に、恐慌が進行する中で、国家独占資本主義をいちじるしく強化し、プロレタリア・勤労大衆に対する搾取と収奪を強化し、産業と行政の合理化を推進している。これに対し、被抑圧階級は㋑ベトナム・インドシナ民族民主革命戦争の勝利と南朝鮮の革命情勢に直面し、㋺搾取・収奪、インフレの進行によっていままでの生活を維持できなくなり、欠乏と困窮が激化することによって㋩プロレタリア階級を先頭にした階級闘争の暴発、激化を不可避としている。プロレタリア・勤労大衆はロッキード事件で暴露された独占資本と右翼の結合、独占資本と政府、官僚の結合、右翼と政府結合という三結合に対して怒りを爆発させている。大衆闘争の発展、爆発は第一に、朝鮮侵略・反革命と戦争に対する闘争、第二に、反動化に反対し、天皇制ファシズム的統治形態に反対する闘争、第三に、国家独占資本主義の下での搾取と収奪、抑圧の強化に反対する闘争を三大水路としている。プロレタリア階級は、被差別部落大衆、被抑圧少数民族、社外工、中小零細企業の労働者などの下層を中心に活動性を高めている。かくて、㋑ブルジョア階級が「いままでどおりの形で、その支配を維持することが不可能」になり、天皇制ファシズム的統治形態への反動的転換を目指してい

ること、㊐他方、被抑圧階級が、日帝の朝鮮侵略、反革命と戦争準備に反対し、天皇制ファシズム的統治形態と、斗い、国家独占資本主義の搾取と収奪、抑圧に抗するという三大水路の下に、大衆闘争を爆発させていることによって、革命的情勢が端初的に始まりつつあるのだ。

(3) 我々の三大任務

我々は、かかる革命的情勢の端初期をこじあけ、おしひろげ、成長期を戦取せねばならない。そのためには、㋑三大水路として発展爆発している大衆闘争に、革命的宣伝、煽動をもちこみ、遂行せねばならないこと、㊐日帝が天皇制ファシズム的統治形態への転換を目指し、反動化し、予防反革命に着手し、一種の「内戦」を上から組織している以上、下からの内乱、プロレタリア階級独裁の樹立を目指すプロレタリア革命戦争を組織せねばならないこと、㋺、㋑㊐を貫徹するために、合法性への隷従とは手を切った非合法の組織を創建すること、の三大任務を果さねばならない。現在、三大任務の最大の重心を非合法組織の建設に、即ち、中央集権主義を組織原則にし、職業革命家の組織を中心にした武装して闘う非合法党の建設にかけねばならないのである。このことを基礎に、革命的煽動、宣伝を組織し、武装闘争を闘うのである。ロッキード事件や春闘をいかに闘うかではなく、武装して闘う非合法党を創建するために、これらの闘いをいかに利用するかが問題にされねばならないのだ。

(4) 社会排外主義を粉砕し、召還主義を批判せよ

武装して闘う非合法党建設の偉大な事業は、社会排外主義を粉砕し、召還主義を批判しない限り前進しない。この闘争は、また、革命的宣伝、煽動の一規準になるのである。レーニンは「社会排外主義とは、ブルジョア的腫物である日和見主義が社会主義諸党の内部でいままでどおりの存在をつづけられなくなったほどに成熟したものである」「現在の帝国主義戦争で祖国擁護の思想をみこめ、この戦争で社会主義者が「自」国のブルジョアジーおよび政府と同盟することを正当化、「自」国のブルジョアジーにたいするプロレタリア的＝革命的行動を宣伝し支持することを拒絶する等々、することである」と、いった。日帝の朝鮮侵略・反革命の強化と戦争準備に直面し、日和見主義＝今日の社会帝国主義は「いままでどおりの存在をつづけられなく」なり、社会排外主義に転落し、反動化し、日帝の朝鮮侵略・反革命の事実を否定し、国内平和をがなりだし、その結果、朝鮮人民の民族民主革命戦争に敵対することになり、「「自」国のブルジョアジーおよび政府と同盟することを正当化」している。社会党江田派、協会派、「日共」宮本一派、カクマルらは、すでに祖国擁護の思想に屈服し、社会排外主義に転落している。清算主義も、社会排外主義に急速に近づき、反動化しはじめている。清算主義を形成している部分は、社会帝国主義とちがい、67年から72年にいたる武装闘争を闘いぬいた。しかし、彼等はこの闘いを誤りであったと総括し、社会帝国主義に思想的に屈服し、今日、それは全面化しつつある。それゆえ、『反覇権通信』派や毛沢東教条派の清算主義者が、社会帝国主義に反動化し、転落するのは、時間の問題といえる。他方、召還主義は社会排外主義と闘うことを公言しているが、それといかに闘い、どこにむけて組織していくのか一切物語ろうとしない。なぜなら召還主義は反スタ・トロッキズムの世界同時革命論、一国社会主義不可能論に依拠しているために何一つ革命の問題を具体的対象化できないからである。その結果、召還主義は、社会排外主義の真の批判者たりえず、遂に、プロレタリア・勤労大衆に対する社会排外主義の組織化を裏から手助けすることになるのである。ゆえに、我々は、社会帝国主義を粉砕し、召還主義を批判せねばならないのであり、この闘いの中で、日帝の朝鮮侵略・反革命戦争を革命戦争に転化し、プロレタリア階級独裁の樹立＝社会主義革命を組織する武装して闘う非合法党の創建が克ちとれるのである。

(5) 『革命通信』第一号の女性差別表現を自己批判する

我々は、三大任務、就中党建設を基礎とした闘いを更に前進させねばならない。社会排外主義を粉砕し、召還主義を批判せねばならない。そのためには、我々が、犯した誤りを認め自己批判せねばならない。我々の誤りとは何か。それは、『革命通信』第一号で、我々が女性差別を拡大、増張させるいいまわしをしたことである。我々は、第一号紙上で塩見一派批判、主要には政治的浮動分子＝西条 にたい して次のようにヤユした。「日の当らない六畳の夫婦部屋をあてがわれ、塩見嫡子の子守炊事のあい間、あい間に書いた塩見への忠誠。。」と。西条が政治的動揺分子であり、軟らかいロウであり、口先で塩見批判、実際は塩見一派のイデオローグとして小ブルジョア急進民主主義、経済主義の道をはき清めている二面派であることはいかんともしがたい事実である。我々は、かかる西条への批判にいささかの容赦もしないつもりである。しかし、この表現は誤りであり、女性差別であった。レーニンは「婦人を公務に、民兵に、政治生活にひきよせなければ、婦人を愚鈍にする家庭と台所の境涯から彼女たちをすくいださなければ、真の自由を確保することはできない。民主主義さえ1社会主義はむろんのことーうちたてることは出来ない」と、いった。このレーニンの出張は、婦人を「家内奴隷」の位置に封じ込める封建的ブルジョア的思想への激しい批判としてあった。我々は、レーニンの主張に反した。我々の誤りは明白である。男（性）が「子守りをすること、炊事をすること」をヤユしてはならなかったのである。それは、婦人のブルジョア社会での抑圧を容認することにつながるからである。婦人の政治活動ー政治生活への決起がー「革命の成功が婦人の参加する程度のいかんにかかわっている」以上、そして、革命と反革命の一時代にあって決定的にこれらの観点と実践的解決が重要なことである以上、我々は、断固として婦人の政治活動への決起にむけた闘争に具体的に着手していかねばならない。

我々は、女性解放運動を担っている多くの活動家から批判され、やっとこうした事に気が付いた。我々は、我々を批判した多くの女性活動家に感謝する。と同時に、プロレタリア・勤労大衆、とりわけ、女性解放運動を先進的に担っている人々に自己批判する。そして、女性解放運動に、積極的に関わり、風雨されされる中で、革命的翼としての自己を打ち鍛えてゆくつもりである。朝鮮侵略・反革命戦争にむけたブルジョア階級のイデオロギー攻撃は、再び「良妻賢母」「軍国の母」を前面化し、日々強化されている。と同時に国家独占資本主義の下で強化されている搾取と収奪、抑圧は「安価の労働力」としての婦人労働と、労働者の有力な代用物」としての婦人を大量に生み落している。我々は、こうした日帝の女性差別の強化に反対し、女性差別の根本的廃 の為に闘う。それが武装して闘う非合法党の下に組織される「安保粉砕、日帝打倒、米帝追放、プロレタリア階級独裁の樹立、社会主義建設」の闘いであることはいうまでもないであろう。

2・10 HJ闘争に勝利する！

全国の労働者。勤労人民諸君！

よど号H・J統一「被告」団は、塩見の統一公判からの分離、大菩薩破防法公判への併合策動と、それを利用した地裁・検事の逆転・実刑判決攻撃を打ち破り、2・10統一公判斗争を革命的に推進した。

昨年二月六日統一公判廷に於ける塩見の上原「被告」殴打事件から一年余りの二正面斗争を我々は勝利的に貫徹し、五年間のH・J公判斗争の切り拓げ、日帝の朝鮮侵略反革命戦争遂行と対決し朝鮮南北の自主的・平和的統一斗争・朝鮮南部人民の反米・反日・朴打倒の民族解放・民主主義革命を新呼支持する斗いの一環としてH・J公判斗争を斗い抜く布陣を遂に克ち取った。

2・10統一公判斗争は、正に「金浦空港問題」を軸にした政治暴露＝日、米、「韓」の共同反革命軍事体制の徹底した暴露を斗い抜き統一公判斗争の第一の目的の端初を切り拓いた。

その結果、塩見の分離問題を利用し、共謀問題でのデッチ上げの破綻を取り繕い、金浦空港問題での日、米、「韓」の共同反革命軍事体制の暴露を防ぎ、審理をスピード、アップさせ、早期結審を狙い塩見、高原同志の保釈を阻止し、長期の実刑判決を下そうとした地裁、検事の逆転・実刑判決策動を完全に粉砕し、統一公判斗争の第二、第三の目的を克ち取った。

暴露された日米「韓」反革命軍事体制

2・10公判は、よど号副操従士、江崎証人に対する「被告」団、弁護団の反対尋問が展開された。我々の追求に対して江崎証人は、しどろもどろの証言しかなし得ず、日帝権力の代理人たる役目を果し得ないばかりか、金浦空港への「韓国」空軍（米軍）の強制着陸、空港の偽装工作が如何に反革命的、反人民的行為であったかが暴露され、批判され、詰問されると「今から考えてみると、全くデタラメなことをしたか思い知らされています」「……この時（金浦空港の偽装を九名同志が見破った時）が、乗客の生命が一番危険な状態でした。……この責任は（米・日・「韓」共同の）偽装で犯人をだまそうとした当局にあると思います」「犯人（九名の同志）の后（見破った）の措置は立派で暴破されたり、殺されるとは思わなかった」等々と自己批判するに至っている。そして全体的反証の過程で羽田から板付、板付から金浦、金浦から平壌に至る日、米、「韓」の反革命軍事体制連関の実態を余すことなく暴露し尽した。

この2・10公判斗争の革命的推進は、よど号H・J公判斗争を日帝の朝鮮侵略反革命（戦争）と斗う広範な大衆的政治斗争の一角を荷う斗いへと押し上げ、朝鮮北部に飛んだ9名の同志と固く団結し、朝鮮の自主的平和的統一斗争、朝鮮南部人民の反米、反日、朴打倒の民族解放、民族民主主義革命を支持していく第一歩を築きあげた。

（プロ革）派のH・J公判斗争の放棄を糾弾する！

我々は（プロ革）派に対して2・10公判斗争を塩見分離攻撃粉砕に向けて共に斗うことを呼びかけた。

しかし（プロ革）派は当日、誰れ一人として地裁に登場せず、又、おずおずと「H・J公判斗争の革命的推進」を叫びたててきたにも不拘、H・J公判斗争を放棄した。12・24公判に於て、地裁、権力と斗わず、我々に対する党派斗争のみを目的化し、「内ゲバによる審理の妨害」という口実を権力に与え、地裁を側面から援助していた（プロ革）派は、塩見の再度の方針転換（大菩薩破防法公判への併合を通して個人の保釈の展望を引き出そうとしたが、その展望が消え去ると分離反対を叫び、三「被告」に対して「無期限出廷を拒否せよ！」などとデタラメな要求を押しつけたが、粉砕されると再び分離ー併合申請を手続きした）に伴って原則的公判斗争の推進を放棄した。塩見は？17分離公判（塩見一人）に応じ、統一公判での審理経過をそのまま塩見の公判に持ち込もうとする地裁、権力の攻撃を受け入れた。これは、塩見がH・J公判斗争の原則的展開を放棄し、権力の攻撃に屈服したことに他ならない。この結果は、我々が何度となく（プロ革）派に警告しておいた様に、塩見の公判斗争方針の誤り故の敗北であり、結局、自己の保釈を（党建設の第一）と主張していた塩見の党建設路線の敗北だったのである。我々は塩見の小ブル自由主義思想の敗北を反面教師として生かしていくであろう。

再度警告しておこう。保釈問題は政治的かけ引きや一般的技術の問題ではないこと。公判斗争の勝利的推進のみが唯一の勝利の鍵であり、塩見の分離要求は、権力を利し保釈を遅らせることはあっても、決して早めることはないこと。地裁、検事の狙いは高原同志、塩見への実刑ー投獄であり、我々はこれを絶対に許さず、公判斗争の革命的推進を通して粉砕し、保釈斗争に勝利していかねばならないのである。「転向」分離ならば塩見式保釈斗争も展望をつかめるかもしれないがマヌーバーはしょせんマヌーバーに過ぎないのだ。

2・10斗争の地平を押し拡げ、我々は更に前進する。

我々は、日本帝国主義の朝鮮侵略、反革命（戦争）遂行前夜の階級情勢を踏え、H・J公判斗争を日、米、「韓」の侵略、反革命軍事体制を徹底的にあばき出し、朝鮮人民の自主的・平和的統一斗争を新呼支持し、朝鮮南部人民の反米、反日、朴打倒の民族解放、民主主義革命の暴発を圧殺せんとする日帝の朝鮮侵略反革命（戦争）遂行に向けた全ゆる策動と全面的に対決する斗いとして組織し抜く。我々は多くの友人達と「被告」団の団結の下にその第一歩を踏み出した。

我々はこの革命的地平を更に押し拡げ、前進する。そして、日本労働者階級、人民に依拠し、マルクス・レーニン主義の下に日本労働者階級の前衛＝武装し斗う非合法党を建設し、プロレタリア階級独裁の樹立、社会主義建設、共産主義の実現に向け斗い抜く。これこそ連赤総括を正しく克ち取り、田宮同志たちの総括を主体的に受け取めた我々の道であり、日本帝国主義の朝鮮侵略反革命と真正面から対決するよど号H・J公判斗争の背骨である。

よど号副操従士江崎証人に対する反証を革命的に推進し、次回からのよど号被疑＝石出に対する証人尋問を徹底して斗い抜きH・J統一公判斗争を朝鮮侵略反革命（戦争）と斗う一大戦場と化すであろう。

三里塚・岩山大鉄塔を死守せよ！

―2・22闘争報告―

三里塚斗争十年の一切の攻防は、岩山大鉄塔を断固防衛し抜くのか。それとも日帝―空港公団の破壊を許すのかとして急速に焦点まっている。

60年代後半、幾多の政策変更の末、三里塚空港建設を決定した日帝の背景には、敗戦帝国主義として出発した戦后の経済的混乱の終熄と重化学工業化の完成、独占資本への集中といった中で、過剰商品、過剰資本のはけ口として外侵略、市場開拓という、資本主義の要請が緊急なものとして存在していた。そのための空の前線基地の建設として三里塚は位置付けられたのである。頭の先から爪の先まで血塗られたブルジョアジーは自からの延命のために、人民の弾圧、生活破壊をものともせず奴らの政策をゴリ押ししてくる。空の侵略前線基地―三里塚空港建設を至上任務とする日帝ブルジョワジーは、そのために農村解体―土地収奪として、三里塚農民にその牙を向けてきたのである。

三里塚斗争は頭初、三里塚農民の生活防衛、土地防衛の斗いとして出発した。しかし、生活防衛という極めて経済主義的斗いの枠内では条件斗争という限界を多く持ち、事実、条件派農民は三里塚反対同盟を脱落していったのであり、それに手を貸したのが日本共産党であった。三里塚農民の生活防衛、土地防衛の斗いを受動的、条件的なそれから、能動的、攻撃的な斗争に転化したのは、68年2・3月斗争を当時の全学連―反戦との結合の中で実力斗争として日帝―空港公団を攻撃したところから始まった。

三里塚10年の斗いは、小商品生産者の私有財産の土地を防衛するという枠をのり越え、「人民耕作地」とか「共同農地」に萌芽的にみられるように、土地は農民のものであり、人民のものであるという文字通り社会主義的な農村革命の方向性を指したものであった。こうした三里塚農民自身の意識変革を媒介に、日帝―空港公団との斗いを、非妥協的な実力斗争として貫徹し、全国の斗う労働者、農民、学生総体に暴力革命の原則を確保として指し示したものである。1967年9・16東峰十字路機動隊せん滅の勝利は革命戦争の萌芽として日本階級斗争の最先頭をいくものであった。

更に、三里塚農民自身が積極的に全国の労働者・農民市民、学生と革命的に交流していく中で農村解体―都市下層プロの再生産、即ち日帝の差別―分断政策の中で中間層を下層へ、下層を最下層へという階級再編を暴露してきたことを我々は断固認識していかなければならない。最後に三里塚10年の斗いは「絶対に飛行機を飛ばさせない」斗いであり、日帝の空の侵略前線基地建設を確実に混乱させ、確実に侵略行為を遅らせていることは、文字通りプロレタリア国際主義の内容を持った斗いなのである。羽田空港を利用し、米軍がベトナム侵略反革命戦争へ出撃していった事実をみても、更に佐藤―田中が日米反革命会議に羽田から出発した事実をみても、三里塚から「飛行機を絶対に飛ばさせない」斗いは朝鮮人民の斗い、アジア人民の斗いに現実に連帯した斗いなのである。

第二次強制収容阻止斗争の時「三里塚ざんごうはベトナムに続いている」と表明し、多くのアジア人民やブラックパンサー、PFLP（パレスチナ人民解放戦線）が三里塚現地を訪れ革命的交流を深めてきたことを、プロレタリア国際主義の立場から我々は断固として評価していかなければならない。

「2・22岩山大鉄塔防衛、鉄塔破壊道路建設阻止現地集会」でも明らかなように、今や鹿島、千葉等周辺地域住民がジェット燃料基地建設やパイプライン建設、騒音問題等で空港建設反対の声は確実に高まっており、飛行機の飛べる条件は全くといっていいほどなくなっているのである。敵を過大評価してはならないし、またみくびってもならない。しかし、日帝―空港公団は、確実に追いつめられている。岩山大鉄塔破壊策動は例え鉄塔を破壊しても飛行機は飛べないということを知っていながら、なんとか威信をかけて日帝の焦りを極いかくさんとしての行動なのである。我々はこうした日帝―空港公団の弱点をみ抜き、岩山大鉄塔を断固として防衛し、労農同盟を基礎に北総住民全体をまきこんで、三里塚空港建設を絶対に阻止してゆかねばならない。鉄塔死守闘争は、三里塚闘争を全人民的課題へ更に飛躍させ、空港建設阻止闘争を持続させるための重要な環になっていることを確認しなければならない。それゆえ、我々は、鉄塔死守闘争をとことん闘いぬかねばならないのである。

今日、日帝の朝鮮侵略反革命に反対し、戦争に反対し、更に追いつめられた日帝の差別―分断政策と官僚的警察的専制支配に基づく天皇制ファシズム的統治形態としてのブルジョア階級独裁の反動化を解体し、国家独占資本主義の下での搾取と収奪、抑圧の強化に反対する闘いを三大水路として、日本プロレタリア、勤労大衆の大衆闘争が爆発、発展している。我々は、これら総体が三里塚闘争に含まれていることを確認する。我々は、武装して闘う地下党建設のための闘いとして、と同時に、労農同盟を打ち固め、社会主義統一戦線を組織し、プロレタリア階級独裁の樹立にむけた闘いとして、岩山鉄塔死守、三里塚闘争勝利の闘いを組織してゆかねばならない。

岩山大鉄塔死守！

三里塚闘争勝利！

労農同盟を打ち固め、社会主義統一戦線を組織せよ！

武装して闘う非合法党を創建せよ！

武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党の創建と我々の綱領戦術・組織

山形直（すなおい）

第一章　情勢と我々

(1)戦争と革命の時代の始まり

社会主義国を根拠地とする民族解放闘争が、インドシナで勝利し、米帝の国際支配体制を解体的危機に陥れ、アジア・アフリカ・ラテン、アメリカ、つまり、第三世界の全域に拡大しつつある。南朝鮮とパレスチナとポルトガル、スペインの革命が次の大前線となりつつある。米帝が崩壊しつつある覇権の維持、再編へ向い、ソ連社帝が、米帝に取って代って新たな国際支配体制を確立しようとして登場し、両者の覇権争奪が開始されている。その主戦場は欧州である。第二世界、つまり、二流の帝国主義国である西欧、日本は、第三世界の民族解放闘争の拡大に直面し、第一世界、つまり、米ソ二大帝国主義の世界再分割戦の主戦場となっていることによって、社会主義革命へ向けた革命情勢が端初的に始まりつつある。米ソの第三次世界大戦の危険性が増大している。と同時に、社会主義国を根拠地とする第三世界の民族解放闘争が拡大し、第二世界の社会主義革命が始まることは不可避である。

(2)体制的危機の深まりと革命情勢の端初的始まり

アジアの社会主義国を根拠地とする民族解放闘争のインドシナの次の最前線は、南朝鮮である。朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民は自主的平和的統一闘争を強めており、南朝鮮人民の反米、反日、朴打倒の民族民主革命は爆発寸前である。在日朝鮮人は、民主的民族的権利のために、祖国の統一と民族の解放のために闘かっている。南朝鮮は、米帝のアジアにおける植民地支配体制の残る最大の砦であり、かつ、日帝の唯一最大の植民地、生命線である。ここから、日本帝国主義は、安保体制の下で、米帝と連合して、朝鮮侵略反革命を強化している。朴政権を手先として、南朝鮮人民に対する反革命、軍事独裁支配を強め、朝鮮民主主義人民共和国に敵対し、戦争を排発し、在日朝鮮人に対する民族的抑圧を強めている。

日本帝国主義は、朝鮮侵略、反革命の強化、戦争のために、また、プロレタリア階級が増大し、勤労人民の先頭に立って階級闘争を強めているのに対抗するために、社会主義革命への反革命のために、安保体制の下でブルジョア階級独裁の国家権力を反動化しつつある。天皇制を前面化し、官僚、警察、軍隊を一層強大化し、両者を結合させて、ファシズムへ向いつつあり、排外主義、差別主義、権威主義によって、この下への国民的統合をなそうとしている。と同時に、資本主義の高度成長が破綻し、恐慌が進行する中で、国家独占資本主義を強化し、その下で、プロレタリア階級と勤労人民に対する搾取、収奪、抑圧を強化している。賃金統制を実行し、赤字財政によってインフレを促進させ、産業と行政の合理化と推進している。

これに対して、プロレタリア階級を先頭として、勤労人民の闘争が発展、爆発している。この大衆闘争の発展、爆発は、第一に、朝鮮侵略、反革命に反対し、戦争に反対する闘争、第二に反動化に反対し、天皇制ファシズムに反対する闘争、第三に国家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧の強化に反対する闘争を三大水路としている。労働運動は、革命的高揚に向いつつあり、これによって、民間独占資本の下の労働組合における帝国主義的労働運動の支配は動揺し始め、国家独占資本の下の労働組合（公労協）における新旧修正主義、社会党、「共産党」の支配は、乗り越えられつつある。そして被差別部落民、被抑圧少数民族、社外工、臨時工、中小零細企業の労働者など、旧来の末組織労働者の闘争も激発しつつある。総じて、ブルジョア階級が今まで通り支配することができなくなり、プロレタリア階級と勤労人民が今まで支配されることを望まなくなりつつある。日本帝国主義の体制的危機が始まり、深まり、社会主義革命へ向けた革命的情勢が端初的に始まっている。そして、この情勢は、日本が米帝とソ連社帝の覇権争奪の戦場となっていることによって促進されている。

(3)戦略的総路線と三大任務

このような情勢に対応して、我々は、次のような戦略的総路線を確立する。「朝鮮革命と結合し、米帝、日帝の朝鮮侵略反革命を日本革命へ転化せよ！」が戦略である。「安保粉砕、日帝打倒、米帝追放、プロ独、社会主義革命」が総路線である。そして、これを物質化、実践化するために、次の三大任務を貫徹しなければならない。第一は、革命的宣伝、扇動である。労働運動と結合し、プロレタリア階級独裁、社会主義革命を宣伝、煽動することである。大衆闘争の三大水路に対応して、朝鮮革命、つまり、朝鮮人民の自主的、平和的統一闘争、南朝鮮人民の反米反日朴打倒の民族民主革命、在日朝鮮人の民主的民族的権利のための闘争を支持すること、天皇制ファシズムを打倒し、プロレタリア階級独裁を樹立すること、国家独占資本主義から社会主義へ前進することを宣伝、扇動することである。第二は革命的闘争である。プロレタリア階級独裁権力の樹立を目指す武装斗争に着手することである。天皇制ファシズムの武装力をせん滅する武装闘争をゲリラ戦として開始し闘うことである。第三は革命的組織である。プロレタリア階級独裁の集中的表現として、職業革命家の中央集権的組織を中心として、武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党を建設することである。

第二章　綱領の原則的部分＝思想路線と実践的部分＝政治路線

(1)共産主義革命、プロレタリア階級独裁とマルクス・レーニン主義党

マルクス・レーニン主義は、共産主義と労働運動の結合である。それは、一方では、共産主義革命をプロレタリア階級の階級闘争、プロレタリア階級独裁で実現し、他方では、プロレタリア階級の階級闘争をプロレタリア階級独裁、共産主義革命にまで拡大し、発展させる。

プロレタリア階級は、プロレタリア階級独裁、共産主義革命のためには、マルクス・レーニン主義党へ組織されなければならない。マルクス・レーニン主義党は、プロレタリア階級の前衛であり、暴力革命によって、ブルジョア階級独裁をプロレタリア階級独裁に代え、資本主義を社会主義に代え、終局的には共産主義を実現することを任務とする。

(2)安保粉砕。日帝打倒、米帝追放
プロ独、社会主義革命

現在の日本の社会は、資本主義であり、日本資本主義は高度に発達しており、帝国主義である。日本帝国主義は米帝国主義に従属的に同盟している。現在の日本の国家権力は、日米安保体制に基づく、日本帝国主義と米帝国主義の連合支配である。当面する日本革命は、民族解放を含む社会主義革命である。プロレタリア階級は、貧農と同盟し、中農、都市小ブルジョア階級を結集し、安保体制を粉砕し、日帝を打倒し、米帝を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義を建設し、終局的には、共産主義を実現しなければならない。

第三章　戦術問題

(1)革命的宣伝、扇動、朝鮮革命の支持と、プロレタリア階級独裁の樹立と社会主義への前進

現在、プロレタリア階級と勤労人民の大衆闘争が朝鮮侵略反革命に反対し、戦争に反対する闘争、反動化に反対し、天皇制ファシズムに反対する闘争、国家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧の強化に反対する闘争を三大水路として発展、爆発している。したがって、マルクス・レーニン主義党は、この大衆闘争に対して安保粉砕、日帝打倒、米帝追放、プロ独、社会主義革命という政治路線に基づく宣伝、扇動を持ち込み、遂行しなければならない。

米帝、日帝の朴政権を手先とした朝鮮侵略反革命に反対し、戦争に反対する大衆闘争に対する我々の宣伝、扇動の要は、朝鮮革命の支持である。帝国主義の抑圧民族である日本のプロレタリア階級は、植民地国の被抑圧民族である朝鮮民族の自決権を承認しなければならない。朝鮮民族の自決は、朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮人民の自主的平和統一闘争、南朝鮮人民の反米反日朴打倒の民族民主革命、在日朝鮮人の民主的民族的権利のための闘争という朝鮮革命として提起され実行されているのであり、これを支持しなければならない。朝鮮労働党の自主的平和統一とは南北の統一を平和的に行なうことであり、その前提である南の民族民主革命は暴力革命で行なうことであり、全く正しい。

安保体制の下での日帝のブルジョア階級独裁の反動化に反対し、天皇制ファシズムに反対する大衆闘争に対する我々の宣伝、扇動の要は、プロレタリア階級独裁の樹立である。ファシズムは、プロレタリア階級の社会主義革命に対する反革命のためのブルジョア階級独裁の国家形態である。したがって、プロレタリア階級は、暴力革命によって、ファシズムを打倒し、プロレタリア階級独裁の国家権力を樹立しなければならない。ブルジョア階級と結びついている現在の官僚機構、警察、軍隊などを解体し、プロレタリア階級とそれに指導された勤労人民によって構成される　軍、革命政府などを打ち立てなければならない。天皇制を廃止し、共和制を実現しなければならない。ファシズムに反対する闘争は民主主義闘争ではなく、社会主義革命でなくてはならない。

国家独占資本主義の下での搾取、収奪、抑圧の強化に反対する大衆闘争に対する我々の宣伝、扇動の要は、社会主義への前進である。搾取、収奪、抑圧の根源は、生産手段を独占し、私有するブルジョア階級の下に、プロレタリア階級が経済的に従属していることである。より少数の資本家がより大きな生産手段を占有する独占資本主義やブルジョア階級が国家権力を通じて生産手段を占有し、独占資本が国家権力を通じて経済を統制する国家独占資本主義は、この経済的従属を一層深め、搾取、収奪、抑圧を一層強める。と同時に、独占資本主義は、生産手段の集中と経済の統制として、生産を社会化し、社会主義の物質的基礎を準備する。国家独占資本主義の国家をプロレタリア階級独裁に代えるならば社会主義である。プロレタリア階級は、独占資本主義、国家独占資本主義から自由競争に後退するのではなく、社会主義へ進まなければならない。プロレタリア階級独裁の国家権力を樹立し、生産手段をブルジョア階級から収奪し、国有化し、国家権力を通じて生産手段を占有し、経済を統制しなければならない。社会主義のみが、搾取、収奪、抑圧を完全に廃止する。

(2)革命的闘争、武装闘争

日本帝国主義は、ブルジョア階級独裁を天皇制ファシズムへ反動化し、プロレタリア階級の社会主義革命に対して、上からの内乱、反革命戦争に着手している。マルクス・レーニン主義党は、下からの内乱、社会主義革命戦争、プロレタリア階級独裁の樹立を目指す武装闘争に着手しなければならない。天皇制ファシズムは、軍隊、警察に、民間反革命、右翼も加え、巨大な武装を保持している。だから、これを打倒して、プロレタリア階級独裁の国家権力を樹立する武装闘争は、速決的な武装蜂起ではなく、ゲリラ戦から始まる持久的な革命戦争となる。我々は、天皇制ファシズムの武装力をせん滅する武装闘争をゲリラ戦として、開始し、闘かわなければならない。

第四章　組織問題。革命的組織。武装して闘う非合法のマルクス。レーニン主義党

マルクス・レーニン主義党は、プロレタリア階級独裁の集中的表現であり、中央集権制が普遍的な組織原則である。だが、特殊な条件がある。我々が建設するマルクス・レーニン主義党は、プロレタリア階級独裁の社会主義の権力を握っている合法党ではない。ブルジョア階級独裁の帝国主義国の権力を握っていない非合法党である。

だから、経営＝工場細胞を基礎とすることはできず、公開性と選挙制という民主主義を、したがって、民主主義的中央集権制を組織原則とすることはできない。そうすれば、実際には、労働者の組織を中心とすることになり、合法党になり、地方分権制となる。我々は、職業革命家の組織の中心とし、非公開性と任命制として、唯唯、中央集権制のみを組織原則として、非合法党を建設しなければならない。

我々が建設するマルクス、レーニン主義党は武装闘争を闘かわなければならない。後進国、植民地国の民族民主革命の革命戦争は、プロレタリア階級に指導された農民の革命戦争である。この革命戦争では、プロレタリア階級が組織されたマルクス・レーニン主義党が主として農民が組織された赤軍を指導し、最初からマルクス・レーニン主義党とそれに指導された赤軍が存在する。だが我々が直面しているのは、先進国、米国主義国の社会主義革命の革命戦争であり、プロレタリア階級の革命戦争である。そして、革命戦争が発展し、プロレタリア階級の前衛であるマルクス・レーニン主義党の指導下に、主として、プロレタリア階級の大衆が組織されて赤軍が建設されるまでは、つまり、現在のような革命戦争の初期には、大衆組織である赤軍は存在せず、前衛であるマルクス・レーニン主義党が武装闘争を闘かわなければならない。だから、我々は、職業革命家の組織を中心として、中央集権制として、武装して闘う非合法のマルクス・レーニン主義党を建設しなければならない。指導機関である中央委員会、地方委員会の下に、執行受任機関である地区グループと工場内下級委員会、および、運動全体に奉仕する各種の特殊なグループを配置すること。指導機関、特に、中央委員会は、できるだけ少数精鋭の職業革命家で構成し、党の指導をできるだけここに中央集権化し、逆に、職業革命家のできるだけ多数を、地区グループ、工場内下級委員会に配置し、党に対する責任をできるだけここに地方分散化すること。執行受任機関、特に、地区グループが政治的宣伝、扇動を遂行すると同時に、武装闘争を闘い、地方委員会、中央委員会が政治指導と同時に軍事指導を行なうこと。これが我々が建設する党組織の型である。そして、我々は、職業革命家の組織の下に労働者の組織を統合しなければならない。工場内の組合や各種のサークルと工場内下級委員会の下に、地区グループの下に統合し、もって、合法大衆組織を非合法党の下に統合しなければならない。